

〈監修〉大江田 知子先生 (国立病院機構宇多野病院脳神経内科 臨床研究部長)

## ……パーキンソン病の運動合併症とはどのようなものですか？

パーキンソン病の症状が現れてから3～5年は、ハネムーン期と呼ばれ、レボドパなどのお薬を飲むことで1日中安定した効果が期待できます。

しかし、ハネムーン期を過ぎて病気が進行してくると、お薬の効かない時間帯が出てきて動きが悪くなることがあります。このような現象をウェアリングオフといいます。また、患者さんによっては、お薬を飲んでからしばらくすると、体が勝手にくねくねと動いてしまう症状(不随意運動)が出る場合があります。このような症状をジスキネジアといいます。そのほか、無意識に筋肉がこわばってしまい、体が突っ張るような姿勢になるジストニアと呼ばれる症状がみられることがあります<sup>1,2)</sup>。

これらの症状をパーキンソン病の運動合併症と呼んでいます。

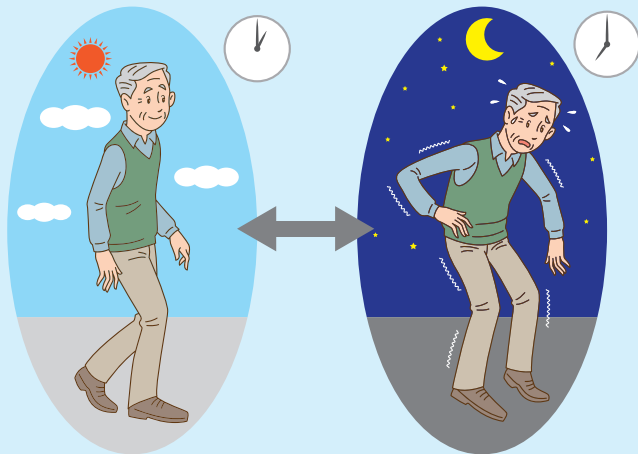
### ●パーキンソン病のハネムーン期と進行期



### ●パーキンソン病の運動合併症

#### ウェアリングオフ

長期間服薬を続けているうちに、お薬を飲んで2～3時間すると効果が薄れて急に動きが悪くなったり、ふるえが起きたりすることがあります。



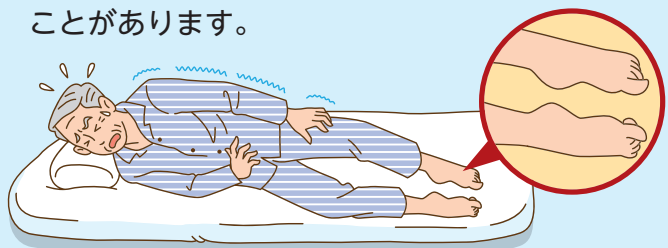
#### ジスキネジア

お薬を飲んでしばらくすると、体幹が前後にくねくねと動いたり、口や舌がもぐもぐと動いたりするなど、体が勝手に動いてしまいます。



#### ジストニア

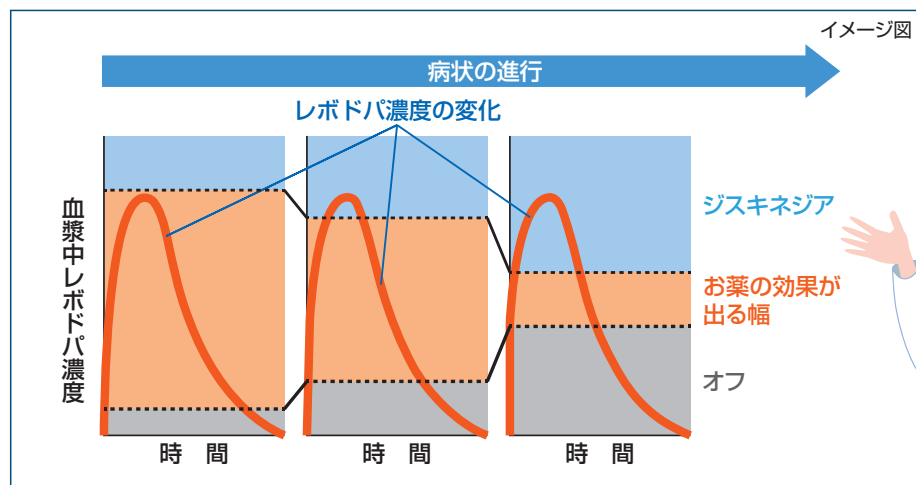
身体が突っ張るような姿勢になります。足が内側に曲がり、親指が反って他の指は足底側に曲がった状態が続き、しばしば痛みを伴うことがあります。



## …………なぜウェアリングオフやジスキネジアは起きるのですか？

パーキンソン病の病状が進むにつれて、適切な効果を表すことのできる血漿中レボドパ濃度の幅が狭くなってきます。そのため、お薬の効き目が落ちた状態になったときにウェアリングオフが起こり、効き過ぎた状態になったときにジスキネジアが起こると考えられています<sup>2,3)</sup>。

### ●ウェアリングオフとジスキネジアが起きる理由



Olanow CW, et al.: Nat Clin Pract Neurol, 2, 7: 382-392(2006)より作成

## …………運動合併症にはどのように対処しますか？

これらの運動合併症には、血漿中レボドパ濃度のピークが高くなり過ぎたり低くなり過ぎたりしないよう、お薬の種類や量を調整したり、お薬の飲み方を工夫したりすることで対処します。

さらに、ウェアリングオフに対しては、レボドパの効果の切れ目を少なくするため、効果が長く続くドパミンアゴニストや、レボドパの効いている時間を延ばす作用があるMAO-B阻害薬、COMT阻害薬、ドパミン賦活薬などを併用します<sup>2)</sup>。

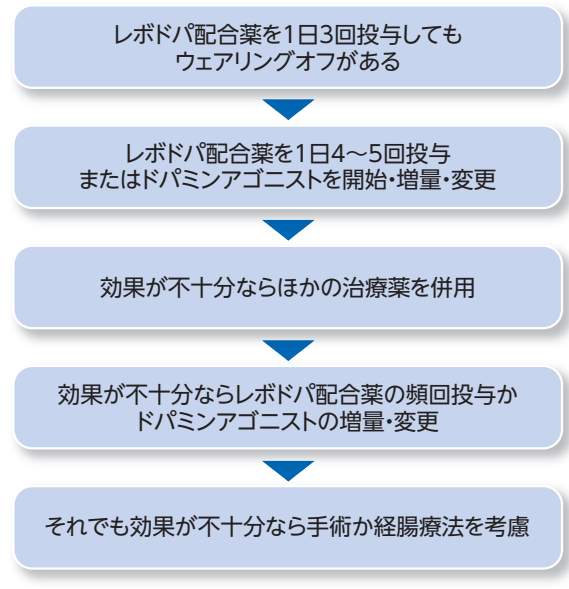
一方で、パーキンソン病の進行期では、胃や腸の動きが悪くなり<sup>4)</sup>、小腸からのお薬の吸収が不安定になるため、飲み薬で運動合併症を防ぐことが難しくなります。

そのような場合には、手術によって電極を脳に埋め込み、電気刺激により運動症状を改善させる脳深部刺激療法(DBS)が行われることがあります<sup>5)</sup>。

また、手術によって胃ろうを造り、ポンプとチューブでレボドパを直接小腸に送る経腸療法が行われることがあります<sup>6,7)</sup>。

### ●運動合併症の治療の進め方

進行期の患者さんの場合、運動合併症の治療は、以下のように進められるのが一般的です。



柏原健一(監修): パーキンソン病のことがよくわかる本. 講談社, 東京, pp52-53, 2015. より作図



大江田 知子先生  
からのコメント

運動合併症の出現時期や程度は患者さんによってさまざまですが、高度の運動合併症は生活を大きく妨げるため、できるだけ対策が必要です。患者さんは、できるだけ内服時間を守ること、その上で症状日誌を記入して、症状変動の様子を主治医に知らせるとよいでしょう。主治医がレボドパの内服時間や量を調整したり、併用する薬を選択したりする際、とても参考になります。

#### 参考資料

- 1) 斎木英資(平成28年度神経変性疾患領域における調査研究班編): パーキンソン病の療養の手引き. pp19-26, 2016. <http://plaza.umin.ac.jp/~neuro2/parkinson.pdf> (最終アクセス日: 2020年3月26日)
- 2) 柏原健一(監修): パーキンソン病のことがよくわかる本. 講談社, 東京, pp50-51, 2015.
- 3) Olanow CW, et al.: Nat Clin Pract Neurol. 2006;2:382-392.
- 4) Varanese S, et al.: Parkinsons Dis. 2011;2010:480260.
- 5) 前田哲也(柏原健一ほか編): みんなで学ぶパーキンソン病. 南江堂, 東京, pp58-60, 2013.
- 6) 長谷川一子: 脳21. 19(4):408-410, 2016.
- 7) 柏原健一(監修): パーキンソン病のことがよくわかる本. 講談社, 東京, pp52-53, 2015. 「パーキンソン病診療ガイドライン」作成委員会(編): パーキンソン病診療ガイドライン2018. 医学書院, 東京, pp125-129, 2018.